



心法 教訓

今昔道樂

下

9
3897
3止



門 口 9
號 3897
卷 3

早稻田 大學 圖書館
藏 27.6.25
書



浪華樹下翁放訓音道此禁下之卷

浪華樹下翁放訓音道此禁下之卷

今む市 邦の町へ之果なるるの男子と捨りおどられ拾ひ
足まば目の足くぬ子うそぞりうらる痛やうおのいあつうば
貞ぐらやうと肯かしの疾いり群はほもせだ極つこども
少ゆる体もつて決考くれば唾勢ありる人へつれりて
あやうぬいさう難かから不具なきまぶゆいりつらん
はくたうかん

語白 鈞是人也或為大人或為小人何曰

音道此禁下之卷

從其大體為大人從其小體為小人

けお徳い今日人々急角肝要のゆあきども唯教心とて
 ありとざるあり凡て世世の生息ある人の中にもからざる不具
 ても徳いとも心とるるやと成るとり又體ハ英一々とも
 ちとる行徳の人たりむうハ神も心人たり佛も心人
 たり聖人賢人よ心人なり亦強盜も心人なりとて真
 心人たりとて徳人たりと人なりと教人たり人成物なり人あり
 人ハ難成とがらん人たり人の難成と教人なり不忠不孝の

人たり孝の忠の義の人たり強欲の人たり無欲の人たり
 放蕩の人たり正直廉直の人たり德行寛容聰明睿智の人
 あり頑愚慣貪の人たり女子も貞女たり淫婦たりけ徳あり
 中より大人君子小人凡そと分るあり是れ體より徳なり
 徳より徳なり所あり故小人小體より大人大體より徳なり
 大體より天より我より人なり我礼智の性なりとてり時ハ
 徳も心人なり佛家より法性佛生不生の心なりとてり
 皆大體の智ありとてり天の命ざるは我の性なりとてり
 私心私欲の才徳と戒め徳を仁とてり心我なりとてり

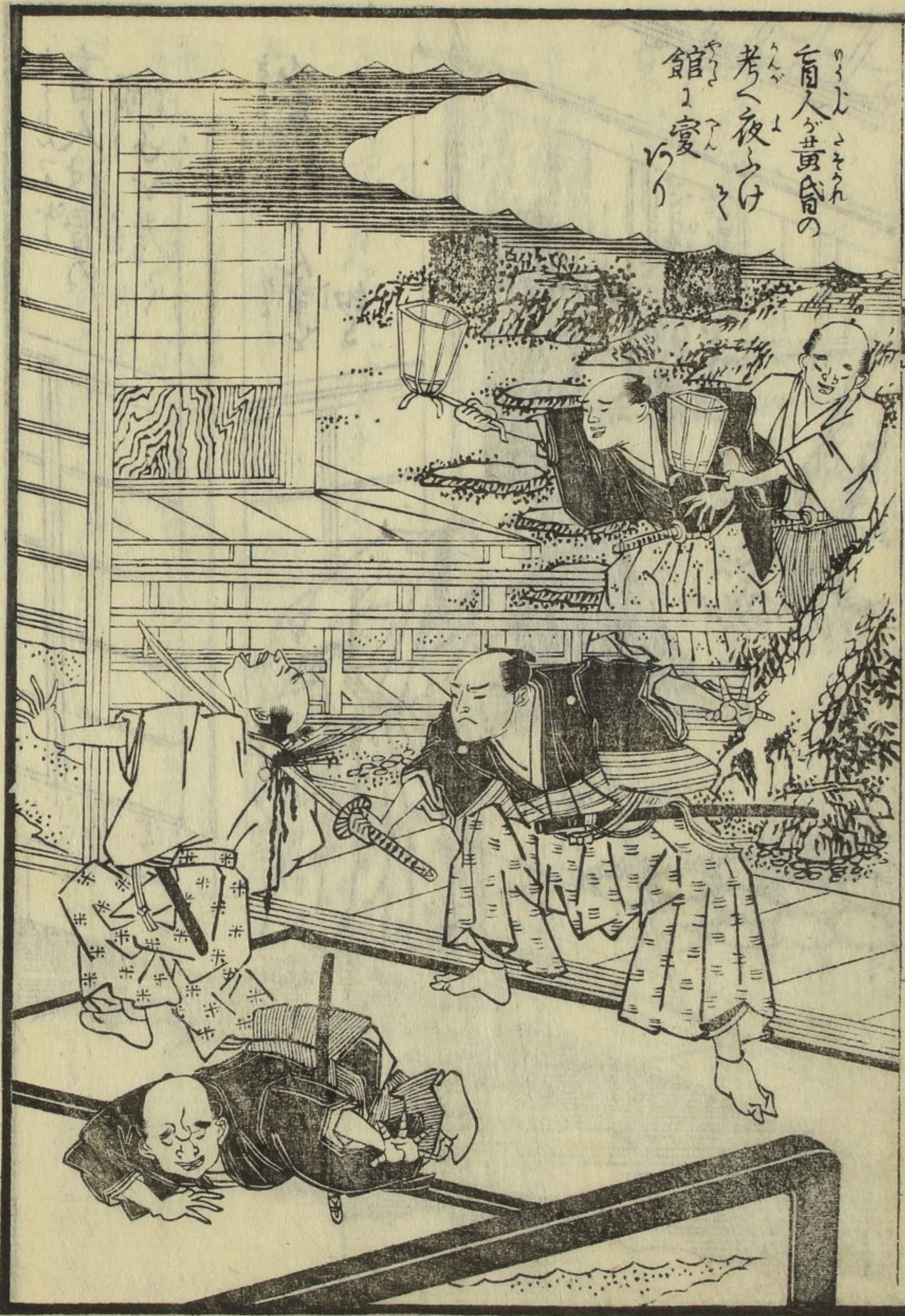
道一作て天に恥ざる中へ俯て人へ恥ざるこそ生涯の太ゆるき
 物と世の人へ恥ぢる利益の建ひきも大切なるに我の室を捨て
 其小事なる名利喰ひの欲不汰むに思に海中に沈みあらずや
 其小聲に後へ小人のあぢいふんといふに小聲に眼耳鼻舌
 身意の六根とてこころとまはけ六根をさへて是よりあらず
 と此の眼に思ふに掃きとる一耳に思ふに掃き一鼻に思ふに掃き
 舌に思ふに掃き一身に思ふに掃き一息に思ふに掃き一
 終に思ふに掃きと掃きしゆ苦しゆぬる果は善や馬の餌食と成
 ぞろ一悔て世大難に後へべし大難に後へ人へはと難に不具



盲人杖音の
 調子と考ふ

山車ゆゑん事と
 知る

盲人が黄昏の
考へ夜明け
館へ寝
り



もくもく道がゆるきば生涯まじり終るありむう萩ア
いひ一盲人去る御値一帯に来り一が或夕暮来り門へ入ん
とて突る杖のぬ居の中はゆるりると赤糸垂しとら度
たはんとては御ゆり事全そ夜殿中小粒乱乃人ゆりて
宿連の者を切殺したり何ちつらも萩一が体ゆるり
翌日萩一はけ事と告られはるまじり時門へ入らんやせと死
杖のゆるり者の御子小あはれある老の者ぬぐり萩一
あはれなドゆりしと云り是等も盲人そ不自由あれ
ども歎の月がづらきて心の月がゆるりゆ命と命と全入りしは小

よつて推て知るべし 昭耳矣 古語にも身みの自由じゆうと云ふ實じつに
 一々又身みと害がいとる道どう具ぐなり 故ゆゑ心こころと誓ちかび天てんのちるる大體たいたい
 小徳せうとくひ私し心こころ私欲しよくと離はなれぬまは眼めあかくて見み耳みみあかくて言こと
 傳つたへる言ことは道どうのまを天てん眼がん通つう天てん耳じを言ことと傳つたへ人ひとのつらうなる
 身み持も成なり知しるべしと唯ただ私欲しよくが務つとむに而しかも醜みにくなり 小體せうたいに從したがふ
 時ときはくや體たいハ英えいしくても神佛しんぶつ聖賢せいけんの目めからく先さきの物語ものがたりの
 育そだつ病びやうの痛いたむ聲こゑとあへもかゝる事ことなり 故ゆゑいふんもあはれ目め
 助たすけうよ見みるるが親おやが親おやと見みるるべしと不孝ふこうのたゞく主人しゅじんが
 主人しゅじんと云ふべしと不忠ふちゆう不節ふせつの不忠ふちゆう公夫こうふうが主しゅと見みるべしと

不負ふふ不義ふぎの身み持もと一ひと兄弟けいぎが兄弟けいぎと云ふべしと他人たにんより
 殊こと恩おん仕しあへぬ友ともが明友めいともと云ふべしと不佞ふべい無なの交まじりをも
 亦また若人わかにんと云ふてもまはれ志こころざしもかくしむるべしと主人しゅじんも云ふ
 育そだつ病びやうの痛いたむ聲こゑとあへもかゝる事ことなり 故ゆゑいふんもあはれ目め
 今いまて天神あまのつちのつみ地祇ぢぎの神かみ靈たま訓のたまひと聞きても耳みみあへぬ佛ぶつの抑おさへんと
 言ことても耳みみあへぬ聖賢せいけん教しやうけんの一人ひとりの道みちのやぐも意いでも言ことても
 けよの人ひと交まじりか出でるるのりなきも主しゅと云ふべしと柳やなぎも云ふるは女にの
 全本ぜんぽん挺た華けかゝるる也なり不親ふしんや主人しゅじんの教しやうけん訓のたまひが教しやうけんも耳みみあ
 風かぜの吹ふく小吳せうごあへぬ世よ世よ打うて身みと云ふべしと主人しゅじんも云ふるは女にの

亦やむむなるハ朝々晩まで去やづりなれども
 ありともいへば何れもいへば持たざる
 成業つるものも夫婦も兄弟もわたりていへば
 アキコト事あるも兄弟も絶たざるもわたりて
 あり成業人のさうらふ言事と憤るとして唯つ
 うりいそあまれ身もさうらの遠いわたり又言
 又さうらふわたり悪く我れに強よるぞう
 戒も十悪の中にて悪口両舌綺語妄語と
 ありさうらふいへば死もさうらのさうらふ
 ありさうらふいへば死もさうらのさうらふ

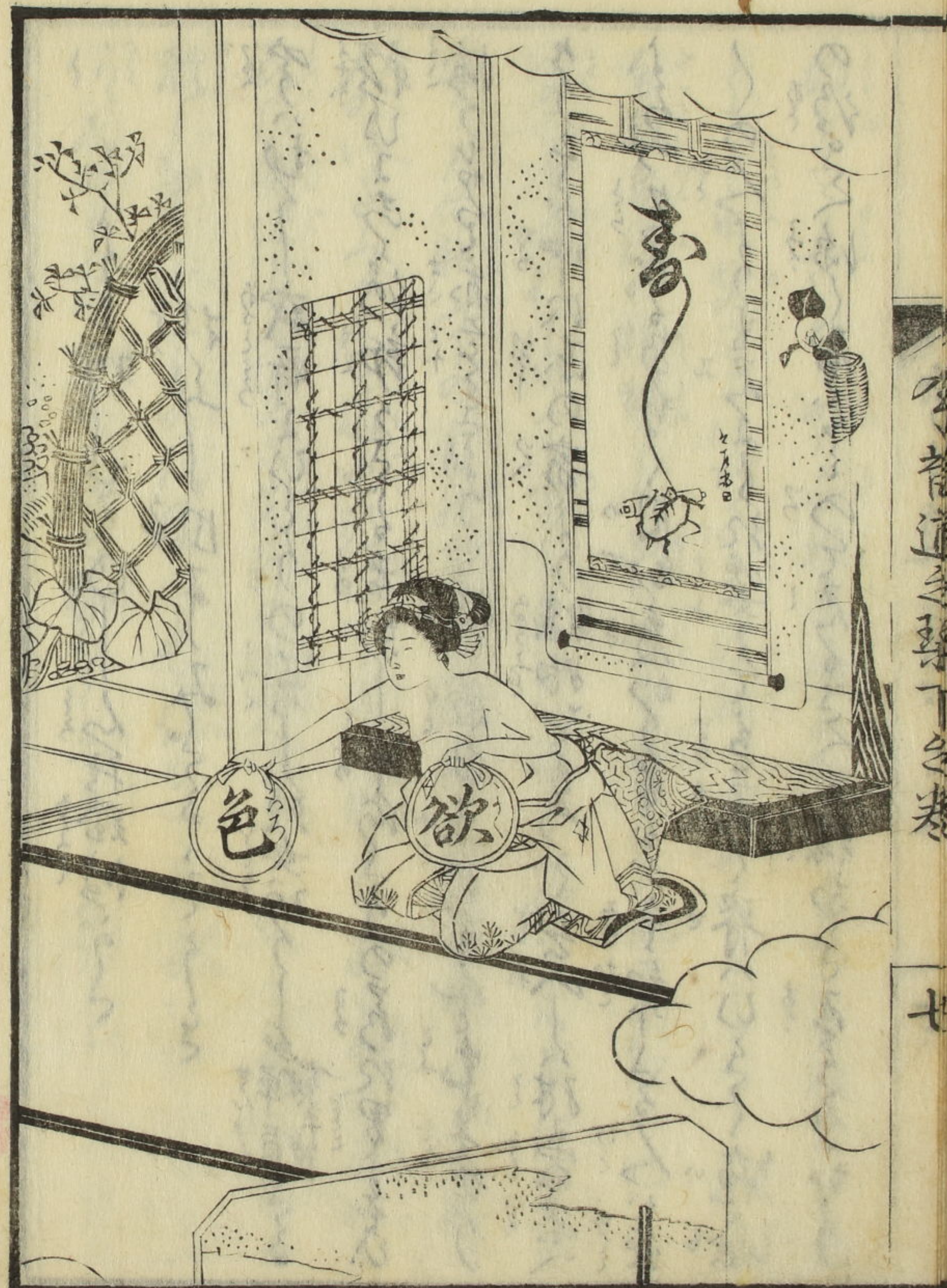
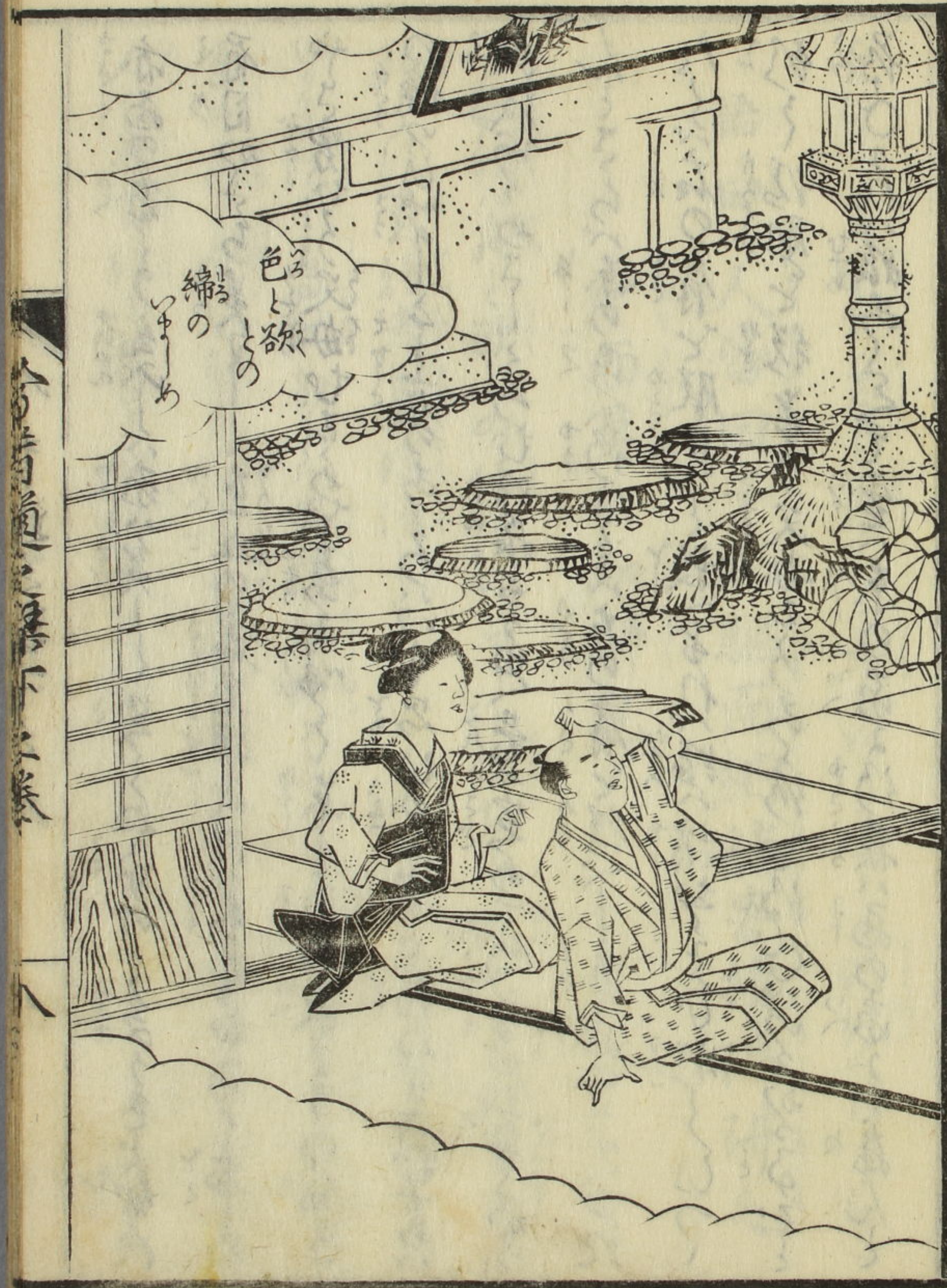
ざるい痛もわたりてさうらふわたりて
 痛も今もいへばわたりてさうらふわたりて
 のつらういへばわたりてさうらふわたりて
 うあつさうらふわたりてさうらふわたりて
 うあつさうらふわたりてさうらふわたりて
 山行をさうらふわたりてさうらふわたりて
 有頂天までわたりてさうらふわたりて
 夫が代りわたりてさうらふわたりて
 おがくわたりてさうらふわたりて

ゆゑと多ひぬる時、上親眷属あつちうてあぶね惚れ免
ども申あさつにけつうる役柄もあつたゆるらぬと
各教年儀の相談して出の煙をまゐるせんしゐるあれたと
まゐるもあつたゆるらぬも申あつたゆるらぬ人の
ううんを執らうの自他盲マ儀痛あつたゆるらぬ人
天のつづる人の道もは行ぐ人もはゆるらぬ人も
あつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人も
教とあり十二分のたの、ゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人も
ゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人も

ううんを執らうの自他盲マ儀痛あつたゆるらぬ人

天のつづる人の道もは行ぐ人もはゆるらぬ人も

ゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人も
あつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人も
あつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人も
あつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人も
あつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人も
あつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人も
あつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人も
あつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人も
あつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人も
あつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人も
あつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人も
あつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人もあつたゆるらぬ人も



色と欲の 締り

喜

七

赤西の家より入る六夜に突くはねるのこまきと知れ
 肩目かちち英りく在血の君光源氏乃若しもおまき若ね
 やさ男ひう父母むさめとあまの味く赤と西のまはうの嫁は
 の條ついでりそ方のおろつひを思ひのよやく初めむすは
 良成何うあさうつむた長もあは定めてめ白くはるかか
 んとさうらぶ赤のまはりくは左の肩と後へ赤西のまはり
 たく左の肩と脱つて教おれは娘は稍おまひはひつ
 ぬく後服と後より父母そのまはりてゆひはつあまのま
 君のまはりては赤のまはりては赤のまはりては赤のまはり

とひくくや可きく悪ある女もつりるまはつてはくはあり

語曰 人皆曰予知驅而納諸罟獲陷阱之

中而莫之知辟也

女も結い又と歌への締りかち信ありんて是は男女に
 限くは美媛若る若信もかかあまのまはりて歌へのま
 ちり既くも歎あまの罟獲陷阱ろどそあまのまはりて余を
 食のあまの命をおまはりて是はもちり実く痛くはつては
 人にも食住も是もそ何不足あまのまはりてはくは

掃^{はら}り^のく^も生^{なま}津^つ成^{なり}ら^して^は指^さと^おり^して^はぬ^らい^はた^るも^ら乃^も
 娘^{むすめ}も^又夫^{おとこ}と^別れ^るの^時に^は婦^{むすめ}の^身を^も守^もり^て東^{あづま}家^{いへ}に^入り^て西^{にし}家^{いへ}に^宿り^し不^ふ
 義^い親^{ちん}痛^{いた}の^をそ^のま^まと^末代^{しろよ}まで^守り^て終^はる^まに^はあ^りぬ^今の^世の^娘
 達^{たち}も^あら^びに^情け^むを^こま^り又^又親^{ちん}を^もた^して^はむ^もと^あ
 の^もが^の乃^もあ^らび^に入^いり^て婦^{むすめ}を^も守^もり^て終^はる^まに^はあ^りぬ^今の^世の^娘
 か^の初^{はつ}む^らい^の似^にし^ては^はた^たま^りぬ^あら^びに^は娘^{むすめ}も^あら^び
 は^あら^びに^はあ^らび^に入^いり^て婦^{むすめ}を^も守^もり^て終^はる^まに^はあ^りぬ^今の^世の^娘
 好^すむ^らい^の似^にし^ては^はた^たま^りぬ^あら^びに^は娘^{むすめ}も^あら^び
 風^{ふう}俗^{じやく}成^{なり}ま^りて^は目^めに^は賣^うれ^ぬ女^{によ}と^して^はあ^らび^に入^いり^て婦^{むすめ}を^も守^もり^て終^はる^まに^はあ^りぬ^今の^世の^娘

り^の明^{あけ}書^き物^{もの}見^みた^まと^は結^{むす}ぶ^のの^やり^には^い回^{まわ}が^たす^るも^ら
 迎^{むか}え^の途^{みち}へ^はあ^らび^に入^いり^て婦^{むすめ}を^も守^もり^て終^はる^まに^はあ^りぬ^今の^世の^娘
 の^をあ^らび^に入^いり^て婦^{むすめ}を^も守^もり^て終^はる^まに^はあ^りぬ^今の^世の^娘
 史^しの^形と^いふ^は尻^{しつ}尾^びに^あら^びに^入り^て婦^{むすめ}を^も守^もり^て終^はる^まに^はあ^りぬ^今の^世の^娘
 は^あら^びに^はあ^らび^に入^いり^て婦^{むすめ}を^も守^もり^て終^はる^まに^はあ^りぬ^今の^世の^娘
 つ^とと^と女^{によ}や^乳母^{にう}あ^らび^に入^いり^て婦^{むすめ}を^も守^もり^て終^はる^まに^はあ^りぬ^今の^世の^娘
 貞^{ちん}鬼^き一^{いつ}つ^とも^あら^びに^入り^て婦^{むすめ}を^も守^もり^て終^はる^まに^はあ^りぬ^今の^世の^娘
 者^{もの}も^あら^びに^はあ^らび^に入^いり^て婦^{むすめ}を^も守^もり^て終^はる^まに^はあ^りぬ^今の^世の^娘
 清^{せい}潔^{けつ}不^ふ妬^た儉^{けん}約^{やく}恭^{こう}謹^{こん}勤^{きん}勞^{らう}の^戒徳^{とく}に^あら^びに^入り^て婦^{むすめ}を^も守^もり^て終^はる^まに^はあ^りぬ^今の^世の^娘

けに致しく書紙を内におよそて出せしむる子も母の書紙
 書いけり初推の時よりもにけりせず親のあま入世るでい
 されたり憎まきたる敵房殺法に生きて後には親れり
 飾り一赤親れかゝるごとく世話して見ても喜ばるる
 喰はるたる中家へはるるは細島一親であり子ではと
 賢い事と思ひの思ひにあらう今あらう何所へ行か
 りやい事あり書きせしむるに不直死すやせしむる
 歎の事いむせむのも中深に母親が細かゝるの事い
 けり見と歎かゝる中けり中いせしむる母の御書紙

眼からうろかゝ娘の中うどあれ初めあま世にまゝ終六
 子孫も改姓しぬく先祖の書紙の煙もたえく同人のあま
 ぞ慕ふ事ぞう婦人のあまくひらうそ慕子もあま
 うりや赤いしむ子供もけり中うどあれ初めあま世にまゝ終六
 列女傳も知るさきより家にはかゝる人へかゝるぞう
 はしむるつらつら娘の神とさまお母もあまの
 一志が蛇ありうのね内あま
 えりて男がまゝれり
 今むの海舞乃人二人けり後若く法でゆきと海と

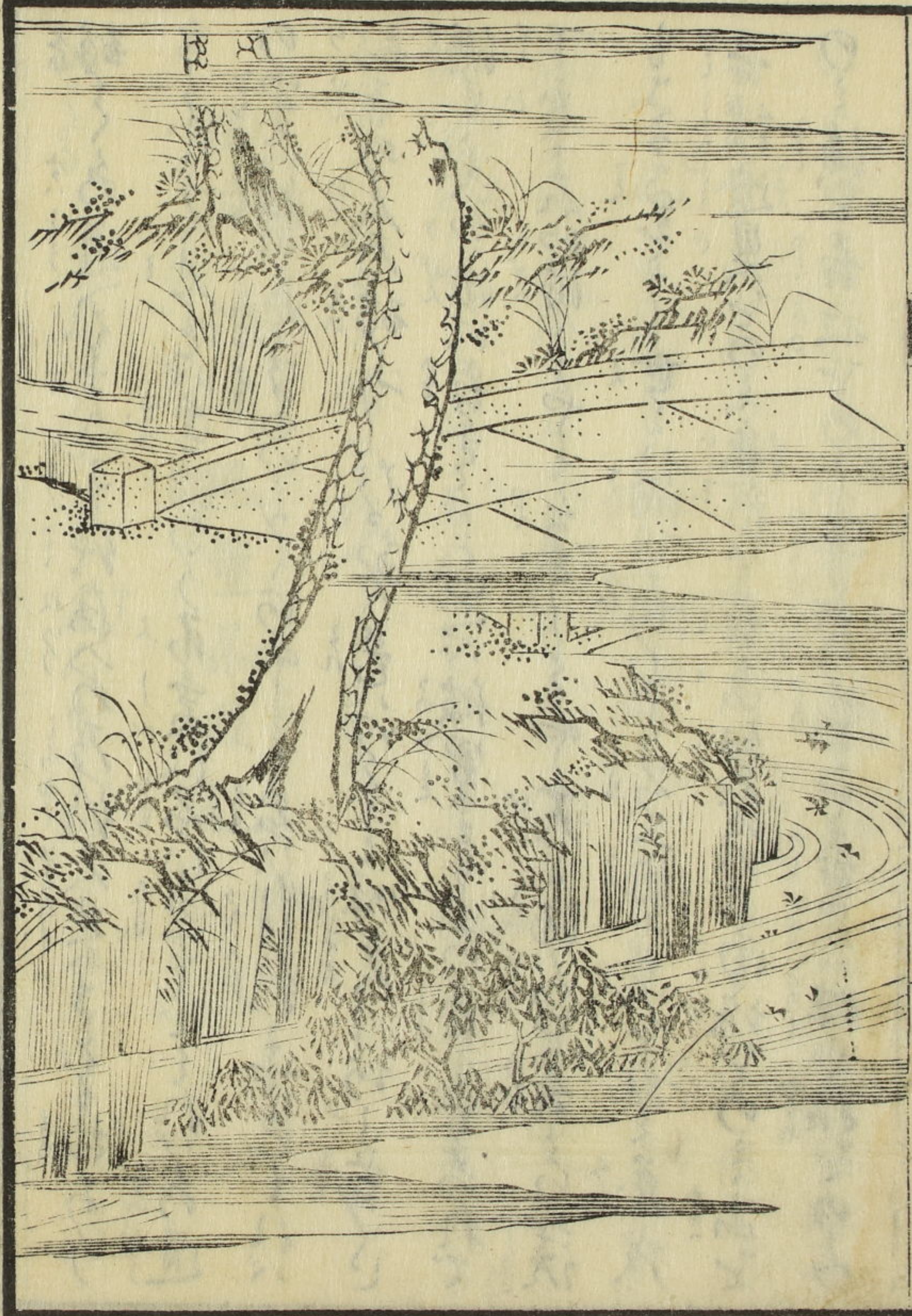
ひこひこ妻のの二人も強く醉ぬはも志どらいあゆふ
あもが今文とうよまうと一人の醉休ねづらすじ捲つても
うろうとうとあしもあらね付あらずも醉ぬはも捨すて置けたらば
肩の上にけり居るの妻あらず後に死ねば妻あらずと思ふ
是ハ衣履をうろとも主人にあらずしらねば扱はれぬはも是れから
うろうにあらずしらねば扱はれぬはも是れから

語曰 惟酒無量不及亂

けいともか可きともやういろう又もまましいれるもいろう或人酒を

醉もあ道をもたりてほろぼろとなる人足下を踏む事あり
幸ふふと見ましる幸としてはあらずにあらむ事ありあ道中に舞う事ありいろうといふ人もいろう
知音の人乃醉ふ也あり是れいろうといふ事ありあ道中に舞う事ありいろう
酒もよかけに吾もいろうといふ事ありあ道中に舞う事ありいろう
丁度よかけに吾もいろうといふ事ありあ道中に舞う事ありいろう
もろろといふ事ありあ道中に舞う事ありいろう
吾緒道具との衣履との衣履との妻あらずと思ふ
の海と吾也との妻あらずの事ありあ道中に舞う事ありいろう

今宮村の
路傍に酔客
水道に墮家



今宮村の路傍に酔客水道に墮家

今宮村の路傍に酔客水道に墮家

終おのに本ほんんと何なにやら〜
 人ひと身み故ゆゑ酒さけの量りやう多おほし〜
 乃すなは借かし金かねとあり〜
 一ひとの男おとこあり〜
 けきけき大おほく〜
 彼かの男おとこじつ〜
 又また父ちち体たてのよ〜
 道みちは美うつくし〜

あり〜
 振ふる〜
 本ほん心こころ振ふる〜
 乃すなは乳ちち母ははも多おほ〜
 後のち世よの〜
 利き是こゝ日ひ合あの〜

鉄挺の中よりわたり爪は長くても爪が短く介は八款でいつても
 後の中へ抜ぐにぬて居る懼貪徳又もわたり世にさぬぐのわけ
 ぐる連中は是れ全くとん明徳の美にわけて唯體のゆるぐに
 骨打て生漉と終るに最もくわい又もそのなりぬち
 かくもある人多く神社佛園へも居焼籠居るおどを測る
 にも所を流小照つけ束の代までもひもつるに積つとんぬ
 怒しひる僅二十年二十年やうにすにす行清くく知まは
 ありもわたり或は文寺の寄進にわたりれ建感ぐる且那と住持
 体にかかと初め今度己が世話しとまはあその有りは流る

改造善清が出来たおど知ぬ人よりで觸分は蘇々もえ
 ても尋られらぬが病いはおも心味の物へ抜てかう斗りよぬそ
 居る又先祖の教で不足おとす町家の分して教多の
 食害とさく金はきあり芝居花柳の者も改と下げさせ
 己やと粹いおと八袖へ吸き一嵐うすぐれと抜ぐと抜作
 どの又いつらてある人へのつと抜ぐにぬて死んで圖魔の
 廳へ住て死の軽重と業の秤でかけらる時時つて官よりよの
 心くおとあまつと物トや死ぬやのるほく焼くころい
 はおと體をやつとるを候圖魔の廳へ引中へいよハ是こそ

ゆきかしの湯大おひり板二毎度さくむらひ子して窓正に紙の
本体成る房一坐ても安樂死でもあふ孫でも安樂死でもあふ
いし誰を言一はく一し申ふ面色

とま一はく誰まさくばさかへむら
はひりし川くりのまは来々

なりし其みありと成るむを
つゆと先ぬさかみぞひりも

今昔道玄集下之卷大尾



心學 闇路指南車

阿州和田耕齋著
浪花松川半山再

全二冊

此書只和田耕齋先生遺稿にて世の人を身と修め家と治め富貴繁
榮し子孫長久にむる基を教へ父母は孝養せし主人は忠義といふ
夫婦兄弟睦なく親類朋友は遠深切親しく其身安樂ふらむ心長閑小
ふじしむらひ夫婦女子近も易く面白く作て善導指南車の繪本

嘉永二己酉年十二月

東都本石町
十軒店

英屋大輔

書林

大阪心齋橋通
北久太良町

河内屋喜兵衛

同唐物町

河内屋太助

